

クレジット:

Mathematics and Informatics Center 数理手法VI 2020 荻原哲平

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



数理手法VI

第3回

1.3 マルチンゲール中心極限定理

確率収束・分布収束

a.s. 収束とは異なる, 確率変数の収束の概念を考える.

定義 1.5

1. 確率変数列 $(Z_n)_{n \in \mathbb{N}}$ が確率変数 Z に「確率収束」するとは, 任意の $\epsilon > 0$ に対して

$$\limsup_{n \rightarrow \infty} P(|Z_n - Z| \geq \epsilon) = 0$$

となる時をいう. この時 $Z_n \xrightarrow{P} Z$ と書く.

2. 確率変数列 $(Z_n)_{n \in \mathbb{N}}$ が確率変数 Z に「分布収束」するとは, 任意の有界連続関数 $f: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ に対し,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} E[f(Z_n)] = E[f(Z)]$$

となる時をいい, $X_n \xrightarrow{d} X$ と書く.

確率収束・分布収束

$E[f(Z)], E[f(Z_n)]$ は, Z, Z_n の分布 μ_Z, μ_{Z_n} を使って,

$$\int f(x)\mu_Z(dx), \int f(x)\mu_{Z_n}(dx)$$

と書くことができる (分布だけで計算できる) .

Z の代わりに分布 ν を使って $Z_n \xrightarrow{d} \nu$ とも書く. 特に ν が正規分布 $N(m, \nu)$ の時, $Z_n \xrightarrow{d} N(m, \nu)$.

確率収束・分布収束

例えば, $Z_n \xrightarrow{d} N(0, 1)$ なら, 任意の $a, b \in \mathbb{R}$, $a < b$ に対し,

$$P(a \leq Z_n \leq b) \rightarrow \int_a^b \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-\frac{x^2}{2}} dx$$

となることがわかる. よって正規分布に分布収束する時, n が十分に大きければ, $P(a \leq Z_n \leq b)$ は近似的に求めることができる.

各収束の関係

- ▶ 確率変数の三つの収束の間の関係として,

$$\begin{aligned} Z_n \xrightarrow{P} Z \quad \text{ならば} \quad Z_n \xrightarrow{d} Z, \\ Z_n \rightarrow Z \text{ a.s.} \quad \text{ならば} \quad Z_n \xrightarrow{P} Z \end{aligned}$$

が成立する。(西尾 3.4 定理 2, 5.5 問 7)

- ▶ しかし, $Z_n \xrightarrow{d} Z$ となっても $Z_n \xrightarrow{P} Z$ になるとは限らない.
 - ▶ 例えば, $Z \sim N(0, 1)$, $Z_n = Z$ とすると, $Z_n \xrightarrow{d} Z$ となり, 正規分布の対称性から $-Z_n \xrightarrow{d} Z$.
しかし, $-Z_n \xrightarrow{P} Z$ は成り立たない.

中心極限定理

$(Z_n)_{n \in \mathbb{N}}$: 独立かつ同分布の確率変数列, $E[Z_1] = 0$, $E[Z_1^2] < \infty$ とした時,

$$\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{m=1}^n Z_m$$

が正規分布に分布収束するというのが中心極限定理.
これをマルチンゲールに一般化したい.

この時

$$\left(\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{1 \leq m \leq k} Z_m \right)_{k=0}^n$$

はマルチンゲールになっている.

※独立かつ同分布の確率変数列を i.i.d. (independent and identically distributed) 確率変数列という.

マルチンゲール中心極限定理

各 $n \in \mathbb{N}$ に対して, $(\mathcal{F}_{m,n})_{m=0}^n$ をフィルトレーションとし,
各 $1 \leq m \leq n$ に対し, $X_{m,n} \in L^1$ が $\mathcal{F}_{m,n}$ -可測かつ

$$E[X_{m,n} | \mathcal{F}_{m-1,n}] = 0$$

とする.

この時, $(\sum_{1 \leq m \leq k} X_{m,n})_{k=0}^n$ は $(\mathcal{F}_{m,n})_{m=0}^n$ -マルチンゲールになり,
 $X_{m,n}$ はマルチンゲール差分アレイと呼ばれる.

マルチンゲール中心極限定理

定理 1.6 (マルチンゲール中心極限定理)

上の $X_{m,n}$ に対して以下の二条件を仮定する.

1.

$$\sum_{m=1}^n E[X_{m,n}^2 | \mathcal{F}_{m-1,n}] \xrightarrow{P} 1 \quad \text{as } n \rightarrow \infty$$

2.

$$\sum_{m=1}^n E[X_{m,n}^4] \rightarrow 0 \quad \text{as } n \rightarrow \infty$$

この時,

$$\sum_{m=1}^n X_{m,n} \xrightarrow{d} N(0, 1) \quad \text{as } n \rightarrow \infty$$

マルチンゲール中心極限定理

証明は省略 (Hall and Heyde (1980) “Martingale Limit Theory and Its Application” Corollary 3.1 とその後の Remark を見よ.)

$p > 0$ に対して, $L^p := \{X \mid X \text{ は確率変数で } E[|X|^p] < \infty\}$ と書く.
 $0 < p < q$ に対して, $X \in L^q$ なら

$$\begin{aligned} E[|X|^p] &= E[|X|^p, \{|X| > 1\}] + E[|X|^p, \{|X| \leq 1\}] \\ &\leq E[|X|^q, \{|X| > 1\}] + E[1, \{|X| \leq 1\}] \leq E[|X|^q] + 1 < \infty. \end{aligned}$$

よって $X \in L^p$ となるので, $L^q \subset L^p$ となる.

マルチンゲール中心極限定理の応用例

例 1.7 (独立確率変数列の中心極限定理)

$(Z_n)_{n \in \mathbb{N}}$: *i.i.d.* 確率変数列, $Z_1 \in L^4$ で, $v = E[(Z_1 - \mu)^2] > 0$ とする.
この時 $\mu = E[Z_1]$, とすると, $L^4 \subset L^2$ より $v < \infty$ で,

$$\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{m=1}^n \frac{Z_m - \mu}{\sqrt{v}} \xrightarrow{d} N(0, 1).$$

Proof.

$$X_{m,n} = \frac{Z_m - \mu}{\sqrt{nv}}, \quad \mathcal{F}_{m,n} = \sigma(Z_1, \dots, Z_m)$$

とおくと, $X_{m,n}$ は $\mathcal{F}_{m,n}$ -可測, $X_{m,n} \in L^1$ で,

$$E[X_{m,n} | \mathcal{F}_{m-1,n}] = E[X_{m,n}] = 0.$$

よって $X_{m,n}$ はマルチンゲール差分アレイになる.

マルチンゲール中心極限定理の応用例

演習問題

上の $X_{m,n}$ に対して, 定理 1.6 の 1. と 2. が成立.

よってマルチンゲール中心極限定理より

$$\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{m=1}^n \frac{Z_m - \mu}{\sqrt{v}} \xrightarrow{d} N(0, 1) \quad \text{as } n \rightarrow \infty$$



コーシー・シュワルツの不等式

次に独立ではない確率変数列に対して定理 1.6 を適用する.

定理 1.8 (コーシー・シュワルツの不等式)

$X, Y \in L^2$ とすると,

$$E[|XY|] \leq \sqrt{E[X^2]} \sqrt{E[Y^2]}.$$

※特に $XY \in L^1$ となる.

Proof.

$t \in \mathbb{R}$ に対し,

$$0 \leq E[(|X| - t|Y|)^2] = E[X^2] - 2tE[|XY|] + t^2E[Y^2].$$

t に関する二次不等式と見れば, 判別式より

$$E[|XY|]^2 - E[X^2]E[Y^2] \leq 0.$$

□

積の分布収束

命題 1.9

$(X_n)_{n \in \mathbb{N}}, (Y_n)_{n \in \mathbb{N}}$: 確率変数列, $c \in \mathbb{R}$, X : 確率変数として, $X_n \xrightarrow{d} X$, $Y_n \xrightarrow{P} c$ とする.

1. $X_n Y_n \xrightarrow{d} cX$. 特に $cX_n \xrightarrow{d} cX$.

2. $c \neq 0$ なら,

$$\frac{X_n}{Y_n} \mathbf{1}_{\{Y_n \neq 0\}} \xrightarrow{d} \frac{X}{c}.$$

証明は吉田朋広「数理統計学」(朝倉書店)の定理 1.57 を参照せよ.

AR 過程の最尤推定

例 1.10 (AR 過程の最尤推定)

$0 < \theta_0 < 1$, $(Z_n)_{n \in \mathbb{N}}$: *i.i.d.* 確率変数列で $Z_n \sim N(0, 1)$ とする.
確率変数列 $(X_n)_{n \in \mathbb{Z}_+}$ を

$$X_0 = 0, \quad X_n = \theta_0 X_{n-1} + Z_n \quad (n \in \mathbb{N})$$

と定める.

$(X_n)_{n \in \mathbb{Z}_+}$ は *AR(1)* 過程と呼ばれ, 時系列の基本的なモデルである.

- ▶ X_n は一つ前の値 X_{n-1} を割合 θ_0 だけ残して, 新たな乱数 Z_n が追加された形. θ_0 は未知パラメータと呼ばれる.
- ▶ 統計学ではデータ $(X_0(\omega), X_1(\omega), \dots, X_n(\omega))$ が与えられた時, θ_0 の値を推定することを考える. θ_0 がわかると将来のデータをシミュレーションしたり, 確率や期待値を計算できる.

1. 最尤推定量の計算

$0 < \theta < 1$ に対して,

$$L_n((x_k)_{k=0}^n, \theta) = (2\pi)^{-\frac{n}{2}} \prod_{k=1}^n \exp\left(-\frac{(x_k - \theta x_{k-1})^2}{2}\right)$$

とおく ($\exp(x) = e^x$). すると, $(A_k)_{k=1}^n \subset \mathbb{R}$ に対し,

$$P(X_k \in A_k \ (1 \leq k \leq n)) = \int_{A_1 \times \cdots \times A_n} L_n((x_k)_{k=0}^n, \theta_0) dx_1 \cdots dx_n \Big|_{x_0=0}$$

と書ける. (L_n は (X_1, \dots, X_n) の確率密度関数と呼ばれる)

1. 最尤推定量の計算

L_n にデータ $(X_k(\omega))_{k=0}^n$ を代入した $L_n((X_k(\omega)))$ を最大にする θ の値を θ_0 の推定値とするのが最尤推定である.

$\ell_n(\theta) := \log L_n((X_k)_{k=0}^n, \theta) + \frac{n}{2} \log(2\pi)$ とおくと, $\ell_n(\theta)$ を最大にする θ を求めればよい.

$$\ell_n(\theta) = -\frac{1}{2} \sum_{k=1}^n (X_k - \theta X_{k-1})^2,$$

$$\frac{\partial \ell_n}{\partial \theta} = \sum_{k=1}^n X_k X_{k-1} - \theta \sum_{k=1}^n X_{k-1}^2$$

となる.

1. 最尤推定量の計算

よって

$$\ell_n(\theta) \text{ が最大} \iff \theta = \frac{\sum_{k=1}^n X_k X_{k-1}}{\sum_{k=1}^n X_{k-1}^2}$$

となる。(ただし, $\sum_{k=1}^n X_{k-1}^2(\omega) > 0$ とする)

ゆえに最尤推定量は

$$\hat{\theta}_n = \frac{\sum_{k=1}^n X_k X_{k-1}}{\sum_{k=1}^n X_{k-1}^2}$$

となる.

2. 推定量の漸近正規性

次に

$$\sqrt{n}(\hat{\theta}_n - \theta_0) \xrightarrow{d} N(0, 1 - \theta_0^2) \quad \text{as } n \rightarrow \infty$$

をマルチンゲール中心極限定理で示す。
この性質は漸近正規性と呼ばれる。

$$\begin{aligned} \sqrt{n}(\hat{\theta}_n - \theta_0) &= \frac{\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{k=1}^n (X_k X_{k-1} - \theta_0 X_{k-1}^2)}{\frac{1}{n} \sum_{k=1}^n X_{k-1}^2} \\ &= \frac{\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{k=1}^n X_{k-1} Z_k}{\frac{1}{n} \sum_{k=1}^n X_{k-1}^2}. \end{aligned} \tag{1}$$

2. 推定量の漸近正規性

$$\mathcal{F}_{k,n} = \sigma(Z_1, \dots, Z_k), \quad Y_{k,n} = \frac{\sqrt{1 - \theta_0^2}}{\sqrt{n}} X_{k-1} Z_k$$

とすると, $E[Y_{k,n} | \mathcal{F}_{k-1,n}] = 0$.

また, $X_k = \sum_{l=0}^{k-1} \theta_0^l Z_{k-l}$ となるので, $Z_k \in L^2$, $X_{k-1} \in L^2$.
コーシー・シュワルツの不等式より $Y_{k,n} \in L^1$.

よって $Y_{k,n}$ に対して, 定理 1.6 の 1. と 2. の条件をチェックすればよい.

2. 推定量の漸近正規性

$$\begin{aligned}\sum_{k=1}^n E[Y_{k,n}^2 | \mathcal{F}_{k-1,n}] &= \frac{1 - \theta_0^2}{n} \sum_{k=1}^n X_{k-1}^2 E[Z_k^2] \\ &= \frac{1 - \theta_0^2}{n} \sum_{k=1}^n X_{k-1}^2.\end{aligned}$$

また,

$$\begin{aligned}\sum_{k=1}^n E[Y_{k,n}^4] &= \frac{(1 - \theta_0^2)^2}{n^2} \sum_{k=1}^n E[X_{k-1}^4 Z_k^4] \\ &= \frac{(1 - \theta_0^2)^2}{n^2} \sum_{k=1}^n E[X_{k-1}^4] E[Z_k^4].\end{aligned}$$

2. 推定量の漸近正規性

$E[Z_k^4] = 3$ (正規分布の4次モーメント) であり, $X_k = \sum_{l=0}^{k-1} \theta_0^l Z_{k-l}$ より

$$\frac{1}{n} \sum_{k=1}^n X_{k-1}^2 \xrightarrow{P} \frac{1}{1-\theta_0^2}, \quad \sup_k E[X_{k-1}^4] < \infty \quad (2)$$

が示される. よって定理 1.6 の 1. と 2. が示されるので,

$$\frac{\sqrt{1-\theta_0^2}}{\sqrt{n}} \sum_{k=1}^n X_{k-1} Z_k \xrightarrow{d} N(0, 1) \quad \text{as } n \rightarrow \infty \quad (3)$$

(1)-(3) と命題 1.9 より

$$\sqrt{n}(\hat{\theta}_n - \theta_0) \xrightarrow{d} N(0, 1 - \theta_0^2) \quad \text{as } n \rightarrow \infty$$

参考：(2) の証明

$X_k = \sum_{l=0}^{k-1} Z_{k-l}$ より,

$$E[X_k^2] = \sum_{l=0}^{k-1} \theta_0^{2l} E[Z_{k-l}^2] \leq \frac{1}{1 - \theta_0^2}.$$

また, ある正定数 C に対して

$$E[X_k^4] = \sum_{l=0}^{k-1} \theta_0^{4l} E[Z_{k-l}^4] + \sum_{l_1 < l_2} \theta_0^{2l_1 + 2l_2} \cdot 6 E[Z_{k-l_1}^2] E[Z_{k-l_2}^2] \leq \frac{C}{1 - \theta_0^2}.$$

よって

$$\sup_k E[X_{k-1}^4] < \infty$$

は言える.

参考：(2) の証明

次に $\frac{1}{n} \sum_{k=1}^n X_{k-1}^2 \xrightarrow{P} 1/(1-\theta_0^2)$ を示す.

$X_k = \sum_{l=1}^k \theta_0^{k-l} Z_l$ と書けるので,

$$\sum_{k=1}^n X_k^2 = \sum_{k=1}^n \sum_{l=1}^k \theta_0^{2k-2l} Z_l^2 + 2 \sum_{k=1}^n \sum_{l_1 < l_2 \leq k} \theta_0^{2k-l_1-l_2} Y_{l_1} Y_{l_2}. \quad (4)$$

補題 1.11

$p > 0$ とする. 確率変数列 $(Z_n)_{n \in \mathbb{N}}$ に対し, $E[|Z_n|^p] \rightarrow 0$ as $n \rightarrow \infty$ ならば, $Z_n \xrightarrow{P} 0$ as $n \rightarrow \infty$.

証明は Durrett 5th ed. の Lemma 2.2.2 等を見よ.

参考：(2)の証明

(4)の右辺第一項，第二項をそれぞれ $S_{1,n}$, $S_{2,n}$ とおくと，

$$\begin{aligned}\frac{1}{4}E[S_{2,n}^2] &= \sum_{k,k'=1}^n \sum_{h_1 < h_2 \leq k} \sum_{l'_1 < l'_2 \leq k'} \theta_0^{2k-h_1-h_2+2k'-l'_1-l'_2} E[Y_{h_1} Y_{h_2} Y_{l'_1} Y_{l'_2}] \\ &= \sum_{k,k'=1}^n \sum_{h_1 < h_2 \leq k \wedge k'} \theta_0^{2k+2k'-2h_1-2h_2}.\end{aligned}$$

($E[Y_{h_1} Y_{h_2} Y_{l'_1} Y_{l'_2}]$ は $h_1 = l'_1$ かつ $h_2 = l'_2$ の時 1 でそうでない時 0)

参考：(2)の証明

$$\sum_{h=0}^{l_2-1} \theta_0^{-2h} = \frac{\theta_0^{-2l_2+2} - \theta_0^2}{1 - \theta_0^2}$$

などから、ある正定数 C, C', C'' があって、

$$\begin{aligned} \frac{1}{4} E[S_{2,n}^2] &\leq C \sum_{k,k'=1}^n \sum_{l_2 \leq k \wedge k'} \theta_0^{2k+2k'-4l_2} \\ &\leq C' \sum_{k,k'=1}^n \theta_0^{2k+2k'-4k \wedge k'} \\ &\leq C' \sum_{k,k'=1}^n \theta_0^{2k-2k'} \leq C'' n. \end{aligned}$$

参考：(2) の証明

ゆえに $\frac{1}{n}E[S_{2,n}] \rightarrow 0$ なので、補題 1.11 より $\frac{1}{n}S_{2,n} \xrightarrow{P} 0$ as $n \rightarrow \infty$.

あとは $\frac{1}{n}S_{1,n} \xrightarrow{P} 1/(1 - \theta_0^2)$ を示せばよい。正定数 \tilde{C} に対し、

$$\begin{aligned} & E \left[\left(S_{1,n} - \sum_{k=1}^n \sum_{l=1}^k \theta_0^{2k-2l} \right)^2 \right] \\ &= \sum_{k,k'=1}^n \sum_{l=1}^k \sum_{l'=1}^{k'} \theta_0^{2k-2l+2k'-2l'} E[(Y_l^2 - 1)(Y_{l'}^2 - 1)] \\ &= 2 \sum_{k,k'=1}^n \sum_{l=1}^{k \wedge k'} \theta_0^{2k+2k'-4l} \leq \tilde{C}n. \end{aligned}$$

よって補題 1.11 より

$$\frac{1}{n}S_{1,n} - \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n \sum_{l=1}^k \theta_0^{2k-2l} \xrightarrow{P} 0 \quad \text{as } n \rightarrow \infty. \quad (5)$$

参考：(2) の証明

$$\sum_{l=1}^k \theta_0^{2k-2l} \rightarrow \frac{1}{1-\theta_0^2} \quad \text{as } k \rightarrow \infty$$

より

$$\frac{1}{n} \sum_{k=1}^n \sum_{l=1}^k \theta_0^{2k-2l} \rightarrow \frac{1}{1-\theta_0^2} \quad \text{as } n \rightarrow \infty.$$

ゆえに (5) と合わせて,

$$\frac{1}{n} S_{1,n} \xrightarrow{P} \frac{1}{1-\theta_0^2}.$$